

広がる高級、そして高級靴のかたち。

男の靴雑誌
「ラスト」
issue 13

LAST

New Precious Things

Special

新しい
高級へのアプローチ。

拡張するリュクスのスタイル。

インディペンデントなビスポークを訪ねて。

No Like Otherな日本のシューメーカー。

今日のジャーマン・レザー、その現場。

クラシック、そして新しいシューズブランドの哲学。

CARVIL / CALMANTHOLOGY

LAST LAB

コートと靴の組み合わせを考える。

New
Precious
Shoes
Selection

モンク、ローファーそしてブーツ
今季の注目をピックアップ

New Precious Idea 02

Independent Shoemakers

インディペンデントなビスポークを訪ねて。

西欧のビスポークといえば、伝統ある靴店がまず思い浮かぶ。その一方で、新たに自身の名で靴づくりを確立しようとする職人たちもいる。それはまた彼らの地の靴づくりの伝統に、新しい展開、新章を加えることでもある。ここではフランスと英国、ふたりの靴職人を訪ね、彼らが目指す新しい高級靴のありようをレポートする。

今津聡子 | 写真 菅原幸裕 | 文
photographs_Satoko Imazu text_Yukihiro Sugawara
translation_Yuki Tamura(Paris)

フィリップ・アティエンザ氏の工房の様子。歩道に面していて、往來する人は作業の様子を見ることができる。「ここはいわばレストランのオープンキッチンみたいなものです」とアティエンザ氏は語る。



3 工房スペースの真ん中にある作業台。パターンづくりなどに使われる。4 工房スペース左奥に設置された色付けなどハンドフィニッシングのための作業台。5 地下はラストや素材の保管や、木型の削りなどの作業を行うためのスペース。機械も置かれている。

○ノリ12区、リヨン駅にほど近いエリア。爛熟した都市に時折見られる、商業地とも住宅地ともつかないエアポケットのような街区を少し歩くと、レンガ壁の、アーチが連なる建造物が見えてきた。東京の万世橋界隈や、ニューヨークのハイラインを彷彿とさせるそれは、やはり元は鉄道の高架だったという。現在は線路の下部部分を、パリ市がリノベーションし、ギャラリーや工房としてアーティストらを誘致しているという。今回訪ねるフイリップ・アティエンザ氏のアトリエ兼店舗はその一角にあった。



経験を重ねたからこそ、独立の価値。

フォーブル・サンアントワン界隈は、もともとは多くの職人が工房を構えていたエリアでしたが、最近では携帯電話のお店のほうが目立っていますね。

そう説明するアティエンザ氏の風貌は、彼の昔を知る人ほど意外に感じるだろう。豊かな髭、その手は複数の無骨なアクセサリで飾られている。スーツ姿が多かったジョフロブ時代とはまったく異なる雰囲気。それはまた、独立した靴職人という彼の現在を、雄弁に物語っているのかもしれない。

2015年に現在の場所に移り、自身名義の靴づくりを開始したアティエンザ氏。その前はガブリエル・シヤネルの靴をつくったことで知られる靴店マサロで約10年間ディレクターとして勤務し、さらにそれ以前は約20年ジョフロブのビスポーク部門で靴づくりに携わっていた。1991年にはMOF（フランス国家最優秀職人章）を授けられている。いわばベテランの彼が、なぜこのタイミングで独立するに至ったのだろうか。

「マサロで10年ほど仕事をし、吸収できる

ことはある程度吸収できたと思っただけでしようか。企業の中にとり成長するチャンスは限られています。仕事と同じことの繰り返りしなところもありますから。」

このように語るアティエンザ氏は、自身の店のモットーを「自由と情熱を追求すること」としている。自由とは、主にマサロで培われたというクリエイションにおける自由を意味する。一方で靴づくりにおける伝統は以前にもまして重要とも。情熱とはこの伝統の継承ということだろうか。彼はまた、著名な靴店のようにスタイルを提示するのではなく、顧客の要望を聞いて靴づくりを行う、ビスポークのマイインドが大切という「私を訪ねていらっしやるお客様は、靴をよくご存知な方が多い。お好みもいろいろなので、要望にあわせた靴づくりを心がけています。」

当初取材班が案内されたのは、広い店舗空間の、中、階のようなスペース。ここでは顧客の採寸やオーダーの打ち合わせなどが行われ、サンブルの靴なども並んでいる。そして



6 中二階のスペースから見下ろした。1階の工房の様子。左は自身のベンチで作業するセバスチャン。アティエンザ氏が木型を削る姿を、通行人が足を止め見つけていた。7 木型を削るアティエンザ氏。木型は独自の形状の楕円形のもの。木型メーカーにオーダーし、それを削ってつくる。



9



8

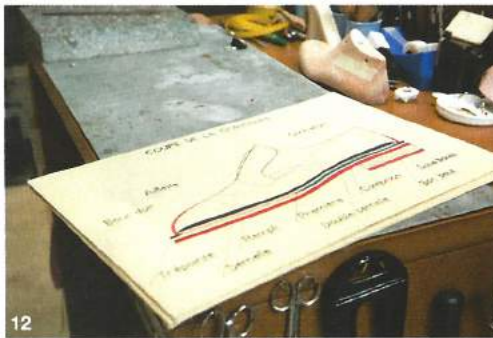
8 小さなギロチンのように上から革に型をつけるノロッキングの器具。革に水分などを含ませてから作業する。9 細い平のテープの両サイドを折ってフヤフヤするための器具。靴づくりのためにつくられた古い器具という。

1階と地下が靴づくりの工房。取材時はセバスチャンという若い職人が作業をしていた。彼の他にも、ビジネスパートナーでもあるローラ・ブントという女性のデザイナー兼靴職人、そして見習いが1名働いているというが、その靴づくりは、現状アティエンザ氏に負うところが大きいようだ。

伝統の手仕事を継承する
独立の職人ゆえの使命感。

アティエンザ氏の案内で工房を見て回る中で気になったことがあった。至るところに、靴づくりの道具がディスプレイされている。壁面には何十本ものコテやウィールなどが並び、1階のワークベンチの傍には、見たこともない器具が置いてあったりする。

10 目見当て切ったパターンを、踵部の形状の基礎となるゲージに当ててみるとピッタリ。ジョン・ロフで9年これをやっていたので、身体が覚えていたんです」とアティエンザ氏。



12



11



10

11 パターンの上にアイレットやフロックの位置などを全て書き込む。靴のスタイルがわかるようにするという。12 靴づくりを教えるために作ったハネル。

古い道具とやり方で、創造性を追求する。



14



13

15

13 オーダーサンプルより、独自のな、ジッパーをモカ部とコバなどにあしらったエプロンフロント。14 古いティールを現代的にアレンジしたレースアップブーツ。15 アティエンザ氏の代名詞的な2モデル。クラシックなものから始めたかったとアティエンザ氏は語る。





17



16



18



19



20

年かけて集められた彼のコレクションであり、時には自分で修理もするのだという。そして「こうした古い道具を使って作業することも、自分にとっては重要なコンセプトでした」と。これもまた前述した伝統の継承ということの、ひとつの表れかもしれない。

もともと靴づくりの伝統という点においては、アティエンザ氏自身が、伝統を体現しているのかもしれない。その片鱗が垣間見えたのが、木型からパターンを起す作業の時。木型に靴のスタイルの線を描き、メジャーで各部の寸法を測ったのちそれをベースに紙の上に線を描き、さらにその紙を木型に乗せてリーステイの線を描いたと思ったら、ナイフを操りあつというまに切りだしていく。その早業はまさに職人技だった。「木型に紙を巻いて線を描き、その後展開してパターンをつくる方法もやってみたのですが、誤差が出やすく、現在のやり方に落ち着きました」とア

ティエンザ氏。過去にはコンピュータを使った木型や靴づくりを試していた時期があったことも知っているだけに、現在の手作業にこだわった靴づくりに少し驚かされるとともに、彼の探究の深さと、伝統を守ることの強い意志が窺えるような気がした。

また、彼のベンチ「作業台」で話していた時、傍に靴の各部の名称をわかりやすく図解したパネルを発見した。これは私の生徒たちに教えるためのパネルです。自分で描いたものですよ」とアティエンザ氏。彼は工房にて自身の靴づくりを行う一方、靴づくりを教えるというという。教え子には職人志望がいれば、趣味的な人もいるそうだが、才能があれば年齢など関係なく上達します、と話すアティエンザ氏は、教えることを楽しんでるように見えた。さらに、そういえば、こういうものもつくったんです」と渡された店のパンフレット。そこには次のような「靴職人の定

義」が書かれていた。

bootie 靴職人【男性名詞】

- ① 洗える靴またはブーツを独創し、制作する職人。
 - ② 顧客の魅力を引き立て、要望に耳を傾けることのできる人。
 - ③ 永年の専門技能の継承とその名声を守る職人。
 - ④ 洗える夢を叶えられる男性、または女性
 - ⑤ 素材の実験者。
- 類語：卓越、品質と創造性。

創造性をもって靴をつくること、古い器械や技術を守ること、靴づくりを教えること、それらはいずれも彼が理想としている靴職人たるための活動なのだ、その記述を読んで改めて納得したのだった。

16 強部の意匠からはクラシックな靴づくりが窺える。17 バイソンレザーのアップパーにあわせて、ヒールも蛇を象ったデザインで自作したパンプス。このあたりはマサコでの経験が生きている。18 底材はフランスのタンナー「Garat」のものを使用。19 エッセヤージュ（仮縫い）の靴。このようにアップパーを切って内部の足のフィッティングなどを確認し、木型を完成させる。20 地下のスペースにあったフロッキング用の型。こうしたのもも自身でつくるといふ。

Philippe Atienza

年2回、アティエンザ氏が来日してストラスブルゴ各店でオーダー会が行われている。オーダー価格 ¥1,100,000～（短靴、仮縫いあり、シューツリー付き）直近のオーダー会は以下の通り。

11月23日（木）
ストラスブルゴ銀座店
tel.03-3573-6190
11月24日（金）、25日（土）
ストラスブルゴ南青山店
tel.03-3470-6367
11月26日（日）
ストラスブルゴ大阪店
tel.06-6243-7842

<http://philippeatienzabottier.com>